

01

召命



THIS IS THE
GOSPEL

THIS IS THE GOSPEL

01: 召命

02: 関係

03: 追求

04: 旅路



序文

皆さんは、どこまでが伝道でどこからが弟子訓練だと思いますか？「伝道は人をキリストに導くこと、弟子訓練は信じた人をキリストのうちに成長させること」というのが、広く浸透している見方です。これだと、救われた時が伝道と弟子訓練の境目ということになります。

でも、もし伝道と弟子訓練という二つの考えが相互排他的なもの（同時に実行できないもの）ではなく密接に関係するもので、福音の途切れのない働き・効果だとしたらどうでしょう？伝道と弟子訓練の定義を考えれば、それがすぐに分かるはずですが。

- 伝道は、イエス・キリストの福音を宣べ伝える・説くこと。
- 弟子訓練は、キリストを知ることができるように、キリストに忠実に従うことができるように手助けする福音中心の育成トレーニング

この『これが福音です』が、弟子訓練ガイドブックとしての役割を果たすには、福音がどれほどの影響力と影響範囲を持っているのかをよく理解することが重要です。多くのクリスチャンは福音を伝道だけに結び付けて、弟子訓練には結び付けていません。つまり、福音はクリスチャンになるために信じるべきものであって、クリスチャン人生で実践するべきものだとは思っていないのです。

福音は救いをもたらす良い知らせです。ですが、それだけではありません。聖化をもたらす良い知らせでもあります。そのことを『これが福音です』は教えてくれます。フォーオックス・コミュニティ・チャーチのデイブ・ハーヴィー牧師は、「聖書のすべては、福音の準備か福音の説明か福音への参加か、です」と上手い表現をしています。

クリスチャンが福音を卒業することは、絶対にありません。どれほど成長したとしても、福音の真理とわざを超えることはありません。私たちは福音に成長していくのです。それが、このガイドブックに『これが福音です』という名前が付いた理由です。

『これが福音です』には、もう一つ特徴があります。それは「関係」を軸にしていること、「関係」に重点をおいた弟子訓練テキストであることです。関係を強調するといっても、決して変な別の角度から弟子訓練に取り組むものではありません。むしろ福音の本質に忠実であろうとしているのです。

福音は「関係」についての良い知らせです。人間は、神と親しい関係を持つために創造されました。ところが、私たちの罪がその関係を壊してしまったのです。その関係が修復（和解）され、私たちが神との関係を楽しむようになるために、キリストが私たちの身代わりになってくれました。福音は、その事を告げ知らせる良い知らせなのです。

弟子訓練の教材は、クリスチャンの行（おこな）い（祈り、聖書の学び、伝道、献金、奉仕など）に焦点を当てるものがほとんどです。でも、このガイドブックは、クリスチャンの关系到焦点を当てています。この学びをすれば、「行いは関係から生じるものだ」と分かるはずで、クリスチャンの歩みの焦点は「神を知ること」です。そこに焦点が置かれてないと、どんな行いや活動をして、人間性や性格の変化にはつながりません。

『これは福音です』は四部構成になっていて、単体としても使える四つの手引書を一冊にまとめたものです。それら四つの手引書を組み合わせて、一つの弟子訓練の基礎と枠組みを提供しています。内容は、次のとおりです

- 1) 召命: 生きるとは、親しい関係を持つこと
- 2) 関係: キリストの土台に人生を築く
- 3) 追求: キリストにあるいのちを追い求める
- 4) 旅路: キリストにある人生を喜んで生きる

第一部『召命』には、伝道トレーニング、神学の基礎知識、そして福音の簡単な説明が書かれています。第二部『関係』は、キリストを信じたばかりのクリスチャンのために書かれたもので、信じてすぐの最初の一週間で使うフォローアップ的な内容です。第三部『追求』は、1か月分のデボーションガイドです。「神を愛する」「クリスチャンの兄弟姉妹と結びつく」「世に仕える」「福音を委ねる」という、弟子訓練において極めて重要な四つの点を強調した内容になっています。第四部『旅路』は、クリスチャン生活の基礎に

ついて書かれたメンタリング（指導）用の手引書になっています。

大事なのは、四つの手引書を順に用いて指導をしていくことです。各手引書は、その前の手引書の内容を土台にして書かれています。このガイドブックは四部で一つなのです。四部すべてを順に使って、信仰に入ったばかりのクリスチャンの最初の15～16か月の歩みを導いてあげることができます。時間的にそれだけの期間をかけられない場合は、2～3か月で指導することも可能です。重要なのは、学ぶ個人（またはグループ）が一つひとつの手引書の内容を（次に進む前に）しっかりと理解していくことです。

イエスは、マタイの福音書28章19節で「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい」と言いました。キリストが「弟子をつくりなさい」と命じているのです。それなら、私たちのミッション（使命）は明白です。このガイドブック『これが福音です』が、多くのクリスチャンに用いられ、多くのキリストの弟子を育成することの役に立ちますように。

年	伝道者	弟子作り者	D-4 群
1	365	2	3
2	730	4	9
3	1,095	8	27
4	1,460	16	81
5	1,825	32	243
6	2,190	64	729
7	2,555	128	2,187
8	2,920	256	6,561
9	3,285	512	19,683
10	3,650	1,024	59,049
11	4,015	2,048	177,147
12	4,380	4,096	531,441
13	4,745	8,192	1,594,323
14	5,110	16,384	4,782,969
15	5,475	32,768	14,348,907
16	5,840	65,536	43,046,721
17	6,205	131,072	129,140,163
18	6,570	262,144	387,420,489
19	6,935	524,288	1,162,261,467
20	7,300	1,048,576	3,486,784,401
21	7,665	2,097,152	10,460,353,203
22	8,030	4,194,304	
23	8,395	8,388,608	
24	8,760	16,777,216	
25	9,125	33,554,432	
26	9,490	67,108,864	
27	9,855	134,217,728	
28	10,220	268,435,456	
29	10,585	536,870,912	
30	10,950	1,073,741,824	
31	11,315	2,147,483,648	
32	11,680	4,294,967,296	
33	12,045	8,589,934,592	

これらのリソースが、キリストの多くの弟子を育成する上で貴重なツールとなることを祈ります。



このガイドブックの使い方

『これが福音です』は、弟子訓練の指導内容をすべて書き記しておくことを意図して作られました。なので、デボーションガイド部分に空欄がある以外には、答えを記入していくような欄はありません。

その根拠は、答えの欄を埋めることに気を取られて、ガイドブックの内容に集中できなくなることを避けたかったからです。それに、学びを導いてくれる指導者がいない場合でも、ひとりでガイドブックにしたがって学んでいけるように、できる限り完全で詳細な内容にしたかったのです。

では『これが福音です』をどう活用すればよいのでしょうか？次を参考にしてください。

- キリストの弟子として成長したい人が、個人的な学びとして用いることができます。自分自身の信仰生活の基礎を確立したい人や霊的成長が止まっているなど感じる人は、このガイドブックの内容を順を追ってひとりで学べます。
- 一対一での弟子訓練（個人指導）に用いることができます。キリストを信じたばかりの人や新しく教会リーダーになったばかりの人を指導するために、基礎テキストとして用いることができます。クリスチャン人生のすべてを扱っているわけではないですが、弟子訓練の主要部分は豊富に取り上げられています。
- 弟子訓練を目的としたスモールグループに用いることができます。このガイドブックは、信仰に入ったばかりの信徒を対象にしたクラスやスモールグループにも適しています。質問したり感想・コメントを述べたりす

る時間を取れるように書き下ろされています。

- 教会に弟子訓練の土台を築くために用いることができます。教会の信徒全員に『これが福音です』を配布するのが無理でも、この内容を礼拝メッセージで伝えることはできます。それにガイドブックに慣れ親しめば親しむほど、ここに書かれている洞察や見解をもっと多くの場所や機会で見分ち合うことができるはずです。

『これが福音です』は、必要に応じて印刷してOKです。たとえば、一度に5人の信徒を弟子訓練することを年に4回繰り返したいとします。その場合、人数分のガイドブックをその都度コピー（または、印刷）すればよいわけです。四つの手引書すべてを一度に手渡すのが難しい場合は、学びが次の部に進むときに、その手引書だけを印刷できます。ただし、学んだ内容を読み返すことや前の手引書を参照できることはとても重要なので、学びに参加する方々には、すべての手引書を順に一つのバインダーにまとめていくように勧めてください。

なお、関連資料についてはwww.thisisthegospel.comを参照してください。このガイドブックに含まれる四つの手引書は、ウェブサイト上では個別に掲載されています。また、ウェブサイトには、他言語でのガイドブックやその他の記事・資料も随時掲載されていきます。キリストの弟子としての成長の助けになる、弟子を訓練・育成するために役立つ証（あかし）やメッセージなども掲載されています。



福音の重要要素

使徒の働き8章25-40節

キーコンセプト: 救いについての質問・疑問のほとんどは、福音についての誤解や混乱が原因

使徒の働き8章25-40節に、エチオピアの宦官(かんがん)が救われる話が出てきます。これは、神と宦官とピリポの視点から宦官の回心の様子(かいま)を見ることができる、貴重な記録です。全体像が分かるからです。

使徒の働き8章、9章、10章の大きなテーマは、すべての人種への福音の広がりです。そして、各章に回心・救いのストーリーが出てきます。8章では、エチオピア人の宦官がキリストを信じます。系図によれば、エチオピア人はハムの子孫です(創世記10章6節のクシュはエチオピアのこと)。9章では、サウロというタルソ人が回心します。サウロはユダヤ人なので、セムの子孫です(創世記10章21節)。10章では、コルネリオ(異邦人)が入信します。彼はヤペテの子孫です(創世記10章2-5節)。

この三つの人種は、ノアの大洪水以降の全人類の人種的分離と地理的分布を示しています。ハムとセムとヤペテは、ノアの息子たちです。大洪水の後、神はふたたび人を地上に住まわせました。つまり、すべての人間は、三人のうちのどれかの子孫なのです。したがって、使徒の働きにある回心の記録は、福音が個人の人生を変えるとだけでなく、人類の三種族すべてに広がることを表しています。

では、エチオピアの宦官の回心ストーリーを辿(たど)りながら、福音の重要要素が何かを見ていきましょう。これらの重要要素は、普遍的な真理です。

1. 福音は、聖霊の働きによって力を帯びる

この真理を理解しない、または、この真理を拒絶すると、救いに関していつも混乱や誤解をすることになります。

「人間の力で救いを得る」という異端に対抗するのは、次の三つの聖書の真理です。

1) 行いによって救われる人は、だれもない。

「恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです」 — エペソ2章8-9節

(参照聖句・テトス3章5節、ガラテヤ2章16節)

2) 自分の義によって救われる人は、だれもない。(ピリピ3章9節)

良い人が救われるのではありません。なのに(そんなに悪い事はしたくないから、救われるはずだ)と思っている人たちがいます。罪の性質について誤解をしているから、そう思うのです。たとえば、店からお菓子を盗んだ人は「泥棒」と呼ばれます。盗んだのが1個だけか100個か100万個かは、関係ありません。盗むという行為が「泥棒」という名を与えるのです。同じように、罪を1度犯したか100回犯したか100万回犯したかは、関係ありません。罪を犯す人間であることが「罪人(つみびと)」という名を与えるのです。

ローマ人への手紙3章23節に「すべての人は罪を犯して、神の栄誉を受けることができず・・・」と書かれています。罪の大きさや数ではなく、罪の本質自体が問題なのです。罪が私たちを神から引き離すのです。

(参照聖句・マタイ6章33節、ローマ4章6節、ローマ10章3-4節、第二コリント5章21節)

3) 決断・決心によって救われる人は、だれもない。

「あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました」 — ヨハネ15章16節

「わたしを遣わされた父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとに来ることはできません」 — ヨハネ6章44節

「ですから、わたしはあなたがたに『父が与えてくださらないかぎり、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのです」
— ヨハネ6章65節

救いは、完全に神の成(な)せる業(わざ)です。そして、神の御心(みこころ)に始まり(使徒13章48節、ローマ8章29節、エペソ1章3-7節)、神の恵みによって実現されるものです(エペソ2章8-9節、テサロニケ2章13節、第二テモテ2章10節、テトス1章1節、第一ペテロ1章1節)。

自力で救いを得ようとする人には、克服できない問題があと二つあります。一つは、私たちが霊的に死んでいて、神に応答することができないことです。エペソ人への手紙2章1節には「あなたがたは自分の背(そむ)きと罪の中に死んでいた者であり・・・」と書かれています。身体的に死んでいるとは、身体的な刺激に反応できないということです。霊的に死んでいるとは、霊的な刺激に反応できないということです。死んでいる人には何もできません！

もう一つの克服できない問題は、サタンによる惑わしです。コリントにいるクリスチャンたちに、パウロはこう書いています。「それでもなお私たちの福音に覆いが掛かっているとしたら、それは、滅び行く人々に対して覆いが掛かっているということです。彼らの場合、この世の神が、信じない者たちの思いを暗くし、神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音の光を、輝かせないようにしているのです」(第二コリント4章3-4節)。サタンとその悪霊たちは、人々が神の真理の光を理解しないように、彼らを惑わそう・だまそうと盛んに働いています。

したがって、聖霊に死んでいる霊を生き返らせてもらい、惑わされた思考を照らしてもらわなければなりません。死んでいる人は動かないし、惑わされた人は信じないからです。聖書がハッキリと示しているのは、「神が救いの道を備えてくれた」ということです。死んでいる霊を生き返らせ、惑わされている思考を照らすのは聖霊の働きです。そうして、父なる神のもとに愛のうちに私たちを引き寄せるのは、聖霊の働きです。

エチオピアの宦官の話でも、聖霊が働いていることは明らかです。まず聖霊は、ピリポを戦略的な場所に導きます。26節に「さて、主の使いがピリポに言った。『立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい』そこは荒野である」、29節に「御霊(みたま)がピリポに『近寄って、あの馬車と一緒に行きなさい』と言われた」とあります。宦官を救いに導いた状況は、明らかに聖霊によって整えられたものでした。

また、宦官の心に尋ねたい質問を呼び起こしたのは聖霊です。ピリポのうちに正しい答えを備えて、宦官を救いに導いたのは聖霊なのです。

神の御霊に働いてもらい、人の心を救いのために整えてもらわなければなりません。また、死んでいる霊を生き返らせ、惑わしを取り除き、真理を根付かせ、神との関係に導いてもらわなければなりません。

神の霊の働きが無ければ、救いはないのです。

II. 福音は、神の御言(みことば)の真理を基盤にする。

救いには、神のみことばが不可欠です。

ヨハネの福音書5章24節「まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、・・・」

ローマ人への手紙10章17節「ですから、信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのみことばを通して実現するのです」

エペソ人への手紙1章13節「このキリストにあって、あなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞いてそれを信じたことにより、約束の聖霊によって証印を押されました」

ペテロの手紙第一1章23節「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです」

聖霊は神のみことばを通して、キリストのみわざを明らかにします。

エチオピアの宦官は、イザヤ書の53章を読んでいた。イザヤ書53章は神の子羊について語っている箇所ですが、彼には理解できませんでした。ピリポが「あなたは、読んでいることが分かりますか」と尋ねる

と、宦官は「導いてくれる人がいなければ、どうして分かるでしょうか」と答え、ピリポに馬車に乗って一緒に座るように頼みました。ピリポは宦官が読んでいた聖句から始めて、イエスが誰なのか、イエスが何をしたのかを、聖書から説明したのです。

ここでピリポがしたことは、キリストがヨハネの福音書3章でしたことと同じです。パウロがコリント人への手紙第一9章で、アポロが使徒の働き18章で、ステパノが使徒の働き7章でしたことと同じです。彼らはみんな、相手の霊的状态や必要に合わせた対応をしました。そして、そうするための十分な聖書の知識を持っていたのです。

福音の大まかなあらすじしか知らないと、会話がそこから逸(そ)れてしまった時に、どうすればよいか分からなくなってしまいます。でも、福音のメッセージを十分に理解していれば、相手の質問や問いかけにもきちんとは対応できるのです。

III. 福音は、神の民の証言によって広がる。

神は人間という器を用いて、その尊い働きを成し遂げようと決められました(使徒2章4節、14節、4章8節、31節、6章3-8節、7章55節、8章17節、10章1-48節、16章25-34節)。神の御手の器であったピリポは、「立って南へ行きなさい」と命じられたとき、立って出かけました。「馬車と一緒に行きなさい」と言われたとき、走って行きました。キリストを証(あかし)する機会が与えられたとき、イエスを宣べ伝えました。ピリポには、その準備ができていたのです。

神は、ご自分の民を通して福音メッセージを伝えるのです。

- イエスは、弟子たちがイエスの証し人になることを、使徒の働き1章8節で告げました。そして、ピリポは証し人として宦官に福音を伝えました。
- パウロは、「しかし、信じたことのない方を、どのようにして呼び求めるのでしょうか。聞いたことのない方を、どのようにして信じるのでしょうか。宣べ伝える人がいなければ、どのようにして聞くのでしょうか。遣わされることがなければ、どのようにして宣べ伝えるのでしょうか」とローマ人への手紙10章14-15節で問いかけています。ピリポは、神に遣わされて神のメッセージを宣べ伝えました。

パウロは、コリント人への手紙第一1章21節で「神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませんでした。それゆえ神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされたのです」と述べています。神はご自分の民を用いて福音を告げ知らせ、それを信じる人を喜んで救われます。

神は、ご自身の知恵によって、神の民を通して福音を広めることに決めました。このメッセージをすべての人に届けるという使命と任務が、私たちには与えられています。神の福音は、私たちの手に託されています。このメッセージを地の果てにまで伝えるようにと、指示を受けているのです。その私たちに、神は御霊とみことばを与えて「行け」と命じられたのです。

こうして福音は「神の御霊」「神のみことば」「神の民」によって、地の果てにまで届くのです。



福音伝道の原則

マルコの福音書4章1-20節

次に、聖霊の働きに注目してみましょう。具体的には、福音を受け入れることができるように人の心を備えるという、聖霊の働きです。これについては、イエスがマルコの福音書4章1-20節で語った「四つの土地」に焦点をあてます。

聖書が救いを比喻(ひゆ)的に語る時、最もよく使われているたとえは農業です。イエスは、マルコ4章のたとえ話で4種類の土壌を取り上げていますが、それらの土壌タイプは、それぞれ「人間の心の状態」と「福音に対する受容性の度合い」を指しています。それと同時に、一つひとつの土地は「聖霊によってどれくらい準備がなされたか」を示しているのです。土壌タイプと御霊の備えをきちんと理解すれば、信仰の強要をすることなく、神の働きに参加できるようになるはずですが。

ここでイエスは「よく聞きなさい。種を蒔(ま)く人が種蒔きに出かけた。蒔いていると、ある種が道端に落ちた。すると、鳥が来て食べてしまった」と語っています。

情景を頭の中で思い描いてみてください。種の入った袋を肩にかけて、種を蒔(ま)きながら歩いている人がいます。蒔いた種のいくつかは、道ばたに落ちています。岩場に落ちる種やいばらの中に落ちる種もあります。そして、よい土地に落ちる種もあります。これが、人の心の状態とその心が福音の種にどんな応答をするかを説明するために、イエスが用いるイメージ・情景です。

1) 硬い土地: 福音を理解してない人(3-4節、15節)

土壌(3-4節)

「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いていると、ある種が道端に落ちた。すると、鳥が来て食べてしまった」

土壌の解説(15節)

「道端に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばが蒔かれて彼らが聞くと、すぐサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを取り去ります」

土壌の特徴

同じたとえ話が、マタイの福音書13章とルカの福音書8章にも記録されていますが、この一つ目の土壌について、より詳しい洞察を解説しているのはマタイ13章です。イエスはマタイ13章19節で「だれでも御国のことばを聞いて悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪います。道端に蒔かれたものとは、このような人のことです」と述べています。つまり、この人は福音を理解しないのです。聖霊の働きからいうと、この人の心はまだ聖霊によって準備されていない状態です。それだから、心は神に関する事柄に頑(かたく)なのです。このような人について、ジョン・マッカーサーは次のように語っています。

「この人が福音を理解しないのは、福音メッセージ自体になにか欠陥や不備があるからではありません。この人自身の頑(かたく)さが原因です。これが、旧約聖書のいう『うなじのこわい者』です。こんな人は、神について無関心です。霊的な事柄をどうでもいい事だと思っているので、みことばも頭に入らないし、心にも刺さりません。福音を馬鹿げたことだと思えるので、聞こうとしません。少しでも霊的に感じるものは、何でもすぐに嫌がります。そして、拒み続けます。そうして、この人の心の土壌はどんどん硬くなっていき、頑(かたく)で鈍感な心になってしまいます」

ただし、相手がまだ福音に興味を持たないからといって、私たちが種を蒔かなくてよいわけではありません。

この土壌タイプの人には、どう対応すればよいのでしょうか。

・ 祈る

- ・ 硬い土壌の心を、神がみことばでほぐしてくださるように祈りましょう（ローマ10章14-17節）
- ・ 真理に目が開かれるように祈りましょう（使徒17章18-20節、26章18節、第一コリント1章18節）
- ・ 神が罪の意識と自覚を与えてくださるように祈りましょう（使徒2章37節）。

・ 種を蒔く

クリスチャンの偽善や世的な生き方を見て、心を頑なにした人もいます。世の人々が必要としているのは、神の力によって変えられて、その変化に伴う生き方をしているクリスチャンなのです。ですから、神から与えられた機会を十分に活かして、人々の心に（会話、本、カード、手紙、メールなどを通して）丁寧に、優しく、神のみことばの種を蒔いてください。

・ 無条件に愛する

相手がどんな霊的状态にあっても、私たちがその人を愛するか・愛さないかには、まったく関係ありません。硬い土壌の人は、福音を理解しているのに信じないではありません。福音を理解していないのです。それを忘れずに、その人を愛してください。

2) 岩地： イエスに従うことには犠牲がともなうことを理解していない（5-6節、16-17節）

土壌（5-6節）

「また、別の種が土の薄い岩地に落ちた、土が深くなかったのですぐに芽を出したが、日が昇るとしおれ、根が枯れてしまった」

土壌の解説（16-17節）

「岩地に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れますが、自分の中に根がなく、しばらく続くだけです。後で、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます」

土壌の特徴

熟考が必要になるのは、この土壌からです。この土壌の人は、みことばを喜んで受け入れます。これは「キリストを受け入れた」ということに

なるのでしょうか？ この人は、しばらくの間は成長するようですが、いのちが無くても育つのでしょうか？

バプテスマのヨハネは「それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい」（マタイ3章8節）と言いました。そう言って、悔い改めのしるしが見えないのに、洗礼を求めに来る宗教者たちを諷（いさ）めたのです。

イエスは、人の生き方や人生がもたらす実を吟味することで、良い人か悪い人かを見分けることができると教えました。「良い木が悪い実を結ぶことはなく、悪い木が良い実を結ぶこともありません。木はそれぞれ、その実によって分かります」（ルカ6章43-44節）。

さらには、イエスがブドウの木で私たちはその枝であり、イエスにとどまる枝は実を結ぶと、ヨハネの福音書15章で述べています。つまり、実こそがイエスのうちにある人かどうかを示す、外面的なバロメータなのです。なので、マルコ4章のような聖句を読むときは、「実は見えるか？」と考えなくてははいけないのです。

この土地は「岩地」です。これは、土地の表面に石ころが転がっている状態を描写しているわけではありません。農夫は、種を植え付ける前に畑を耕します。そのときに、畑から岩石の破片などを取り除きます。つまり、この岩地の「岩」は、鋤（すき）の届かない所にある岩盤のことを指しています。

この二つ目の土壌は、ある程度の準備が整っている状態です。道ばたに落ちた種（4節）は、地面を突き破って地中に食い込むことができませんでした。しかし、岩地に落ちた種（5節）は、土の中に食い込んでいます。それでも、浅い層までしか到達していません。種が浅い所に達すると「・・・すぐに芽を出したが、日が昇るとしおれ、根が枯れてしまった」（5-6節）のです。根が水のある所までは届かなかったからです。要するに、まだいのちを維持できるほどには耕されていなかったのです。

こんな心の持ち主について、16-17節はこう解説しています。「岩地に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れますが、自分の中に根がなく、しばらく続くだけです。後で、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます」。

硬い土壌（道端）の心は、抵抗や敵対をして福音を理解しません。岩地の心は、福音を受け入れはするけれど、福音には犠牲がともなうことを理解しません。救いにともなう犠牲をしっかりと理解しないで（喜んで）感情的な信仰の決断をするわけです。

ジョン・マッカーサーは、こう言っています。「救いには、罪を悔い改める、自分に死ぬ、以前の生活を離れて変わるなどの犠牲がともないます。ところが、それを隠して祝福だけを語る薄っぺらな伝道によって、福音を軽率に受け入れるように勧められる人もいます。詳しいキリストの教えに十分に取り組むことをせずに、挙手や意思表示カードに名前を書くなどの行為で入信を勧められた人は、福音を聞く以前よりもっとキリストから遠のいてしまう危険性があります。浅い信仰告白で、真の救いに入ることを邪魔されてしまうからです」

この土壌は、まだ聖霊が準備している途中です。この人は、土壌が完全に整えられるのを待たずに、キリストへの従いにともなう犠牲を理解せずに、感情的に入信を決断するのです。

さて、岩地の心の持ち主は、どんなふうに見える人なのでしょう？それは、感情的な回心をしたように見える人のはずです。つまり、救われた後、すぐに日曜礼拝やバイブルスタディに参加したり奉仕や働きなどの教会生活を始めたりします。しかし、キリストのいのちにつながるできないので、試練や困難に直面すると、止めたり去ったりするのです。

この土壌タイプの人には、どう対応すればよいのでしょうか？

- 一つ目の土壌タイプへの対応と同じ。
- 熱意や意欲は評価しながら、信仰にともなう犠牲についてきちんと十分に説明する。
- 時間を一緒に過ごしなが、質問や疑問に答えてあげる。

3) 茨（いばら）の土地： 神よりこの世を求める人（7節、18-19節）

土壌（7節）

「また、別の種は茨の中に落ちた。すると、茨が伸びてふさいでしまったので、実を結ばなかった」

土壌の解説（18-19節）

「もう一つの、茨の中に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたのに、この世の思い煩いや、富の惑わし、そのほかいろいろな欲望が入り込んでみことばをふさぐので、実を結ぶことができません」

土壌の特徴

第一に注目すべきは「実」の問題です。この土壌には実りが無く、収穫ゼロです。聖書によると、悔い改めのしるしは成長ではなく実です。（他の聖書箇所・マタイ3、7、13章、ヨハネ15章、ローマ7章、ガラテヤ5章、エペソ5章、コロサイ1章）

第二に注目すべきは、土壌は段階的に少しずつ整えられるという点です。一つ目の土壌は、完全に硬いので、種は地表を突き破ることができません。二つ目の土壌は、表面は耕されているものの、岩盤に到達するには及びません。ところが、三つ目の土壌は、成長できるほど十分に耕されています。どうして分かるのかというと、何でも育っているからです。茨（いばら）も育っているし、みことばの種も成長しています。ただし、茨の方が良い種をふさいでしまうほどに、大きく伸びているわけです。

この土壌の人にとって、神はたくさんある関心事の一つにしかすぎません。神に無関心というわけではないけど、神に身も心も捧げているわけではないのです。（神や信仰は人生をさらに良くするもの）とは思っていても、（神こそが人生。神こそがいのち）とは考えません。なぜ、そうだと分かるのか？それは、「この世」と「神」のどちらかを選ぶ決断を迫られたとき、この人の中では「この世」が勝ってしまうからです。日常生活のこと（住宅ローン、職場、子育て、経済、趣味など）で頭がいっぱいで、神の永遠の真理を深く考える時間などありません。神のことがこの世のことでふさがれてしまうのです。

おそらく、この人はそれなりに歳を重ねた大人でしょう。子どもは「この世の思い煩いや、富の惑わし、そのほかいろいろな欲望」で悩んだりしないからです。これは、福音の真理を知りながら、キリスト以外のものを求めることを選んだ人を描写したものです。

T神にある程度の興味はあっても、この人の主な関心は「この世」のことです。したがって、たとえ霊的になれたとしても、実際には失われている人なのです。この人にあるのは、神との関係・交わりではなく宗教です。この人の内面的な感情、救いの祈りを祈った事実、教会出席率や教会活動から、それが分かるものではありません。「実」の欠如がそう語っているのです。

神の実は、こんな生き方を通して結ばれません。それに、こんな人生に真の喜びはありません。苦難の時に平安がありません。周りの人に対する忍耐がありません。柔和な優しさがありません。人生の歩みに謙虚さも欠けています。聖くあることにも熱心ではありません。要するに、御霊の実を示すものが何も無いのです。

この土壌タイプには、どう対応すればよいのでしょうか？

- 無条件に愛して、さばくような話し方をしない
- 強い信念、明確な理解、判断力が与えられるように祈る。
- 神が、この人の人生から邪魔するものや混乱させるものを取り除いてくださり、この人が自分の霊的現状に向き合うようになることを祈る。
- この人にとって、良き模範であり続ける。

4) 良い土地： 福音を受け入れる人（8節、20節）

土壌（8節）

「また、別の種は良い地に落ちた。すると芽ばえ、育てて実を結び、三十倍、六十倍、百倍になった」

土壌の解説（20節）

「良い地に蒔かれたものとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちのことです」

土壌の特徴

四つ目の土壌は、道端から離れた場所にあつて、十分な深さにまで耕されています。そして、茨や雑草がない状態で生産を維持できる土壌です。その状態だからこそ、実を結ぶことができるのです。

この土壌の生産量は、驚異的です。イエスは、ただ単に豊作だと言って

いるわけではありません。史実によれば、紀元1世紀頃の平均収穫率は8倍以下でした。つまり、イエスが語っている30倍、60倍、100倍という収穫率は、超自然的としか言いようがないのです。それに、イエスがヨハネの福音書15章で教えている「実」「もっと多くの実」「多くの実」ともよく似ています。

神の実は、明らかにハッキリと分かるものなので（この人はクリスチャンだろうか？）と考える必要はないはずです。神の御手があることは、あらゆる面から一目瞭然でしょう。

この土壌タイプには、どう対応すればよいのでしょうか？

- 福音を明確に伝える。どうやってキリストを信じて罪を改めればよいのかを、相手がきちんと理解できるように説明する。

ここまでの内容をまとめると、福音を理解してない人、キリストに従うことに犠牲がともなうことを理解してない人、この世に心を奪われている人、福音を受け入れる人が存在します。種を蒔く者はすべてのタイプの土壌に種を蒔き、収穫する者は良い土壌を専門に扱います。

これは、良い土壌タイプ以外の人をおろそかしてよい、という意味では決してありません。人を巧みに操ったり無理強いしたりして、悔い改めの祈りをさせてはいけないということです。土壌の状態をよく理解することで、それぞれの心の状態に適した、効果的な伝道ができるのです。



福音メッセージの重要ポイント

福音メッセージの重要ポイント

- 私たちは、神と親しい関係を持つために造られた。
(創2-3章、レビ26章12節)
- 私たちの罪が、私たちを神から切り離し、神との関係を壊した。
(イザヤ59章2節、ローマ3章23節)
- 私たちは、神との関係を自力で修復(和解)することができない。
(エペソ2章1-9節)
- イエスは、私たちの罪の代価を払うために十字架で死んだ。
(ローマ5章8-10節、エペソ2章13-16節、第一ヨハネ4章9-10節)
- イエスは、私たちが生きるために死者の中からよみがえった。
(第一ペテロ1章3節)
- イエスは、イエス・キリストを信じて罪を悔い改める者に、永遠のいのち
(神との和解・関係)を与える。
(ヨハネ3章16節、ヨハネ17章3節、使徒2章38節)

上記のポイントの一つひとつ学んで理解し、この順序で福音を説明できるようになるのが目標です。

『福音の簡単な説明』に沿って福音を説明すれば、フォローアップの資料(手引書2)にもスムーズに入っていきます。福音は関係についてのメッセージですが、フォローアップ資料では、その関係が強調されています。

それに、この順序でくり返し福音を説明することで、それを聞く人たち(教会の人たち、スモールグループの仲間、弟子訓練を受ける人たち、キリストをまだ信じていない人たち)のうちに、その説明文と言葉が記憶されていくはずで、同じ真理が同じ順序で繰り返されることで、誤解や混乱は取り除かれていきます。そして、何度も同じ文章や言葉を聞いていけば、やがて福音を理解できるようになるはずで、

大事なものは、一つひとつの重要ポイントをしっかりと学んで、その参照聖句に慣れ親しんでおくことです。参照聖句をすべて暗記する必要はないですが、自分の聖書に印をつけておくとういでしょう。また『福音の簡単な説明』を財布や聖書に入れておくか、スマホに載せておくのも便利です。

福音をこの順序で説明するのに慣れるためにも、次の『さらに詳しい福音の説明』をよく注意して学んでください。各ポイントが詳しく説明されていますが、福音の要点だけでなく、どうしてその要点が福音に不可欠なのかをきちんと知ることが重要です。

あなたが福音を伝えた相手が、まだキリストを信じる準備のできていない人だった場合、『さらに詳しい福音の説明』を手渡すとよいでしょう。そして、その人があとでそれに目を通すように祈ってください。そこに書かれている追加説明が大きな助けになるはずで、補足資料を閲覧できるウェブサイトも記載されています。



さらに詳しい福音の説明

生きる目的って、なに？

いつの時代にも、人はそう問いかけてきました。聖書は、この問いに対する明確な答えを提供しています。人生の目的は、親しい関係を持つことです。

創世記からヨハネの黙示録まで、聖書は一貫して関係についてのメッセージを伝えています。このメッセージが、福音（喜びのおとずれを伝える「良い知らせ」）と呼ばれるものです。

このメッセージを理解して、神の与える永遠のいのちを受け入れるとき、人は生きる目的を見つけるだけでなく、いのちを見つけるのです。「イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。』」ヨハネ14章6節

- 私たちは、神と親しい関係を持つために造られた。

アダムが神のかたちに創造され、神と親しく交わる能力を与えられたことが、創世記2-3章に記録されています。そこには、アダムと神との会話、協力、パートナーシップ（協力関係・信頼関係）、交わり・交流が書かれているのです。

神が関係を求めたのは、アダムだけではありません。神はイスラエルと契約関係を結びました。「わたしはあなたがたの間を歩み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる」（レビ26章12節）。イエスも、ご自分に留まることを弟子たちに教え（ヨハネ15章1-10）、イエスを愛する人にご自身を現わすことを約束しました（ヨハネ14章21節）。また、イエスに従う人を友と呼んで（ヨハネ15章15節）、親しい関係の重要性を強調しました。こうした聖書箇所の一つひとつが、私た

ちとの関係に対する神の熱い思いを告げているのです。

- 私たちの罪が、私たちを神から切り離し、神との関係を壊した
「すべての人は罪を犯して、神の栄誉を受けることができず・・・」（ローマ3章23節）。罪とは、神の律法を破ることです（ヤコブ2章10節、第一ヨハネ3章4節）。そして、罪の報いは死です。神の律法に違反した罰について、ローマ人への手紙6章23節は「罪の報酬は死です」とはっきり告げています。報酬とは、労働や行為に対する稼ぎ・報いのことです。聖書によると、私たち全員が死を稼いだのです。

聖書が死を語る時、それは主に「神から切り離されること」を意味します。身体（からだ）が死ぬと、私たちの霊は身体から切り離されます。それと同じように、私たちは罪のせいで霊的に死んだので、私たちの霊は神の霊から切り離されてしまいました。「むしろ、あなたがたの咎（とが）[罪]が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり・・・」（イザヤ59章2節）。

- 私たちは、神との関係を自力で修復（和解）することができない。
多くの人は（良い行いをすれば、神との正しい関係が持てる）と思っています。しかしながら、神との親しい関係を持つために「どんな良さがどのくらい必要なのか」を教えてくれる決定的な採点方法や明確な目印は、あいにく存在しません。聖書は「普段の行いがだいたい良ければ、神に受け入れられる」とか「善行を三つやれば、悪行が一つ帳消しになる」とか語っていません。善の明確な基準がないのに、どれくらい良ければ「十分良い」と言えるのでしょうか？

私たちの問題は、善の不十分さではなく罪の影響・結果です。そう聖書は指摘します。罪は、私たちに死と惑わしをもたらすものです。だからこそ、私たちに神との関係を修復（和解）することは、絶対にできないのです。私たちは、キリスト無しには自分の背（そむ）きと罪の中に死んでいる者です。エペソ人への手紙2章1節は、そう教えています。それに神の介入が無ければ、この世の神によって真理に対して盲目にされたままなのだ、コリント人への手紙第二4章3-4節が教えています。死んでいる人は何もできないし、惑わされている人は信じません。したがって、私たちが神との和解のためにできる事は、何も無いのです。

- イエスは、私たちの罪の代価を払うために十字架で死んだ。
罪の報酬は死です。イエスは、私たちの罪の代価を払うために十字架の上で死にました。そのイエスの犠牲のおかげで、神との和解が可能にな

ったのです。「敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていたただいたのなら、和解させていただいた私たちが、御子のいのちによって救われるのは、なおいっそう確かなことです」（ローマ5章10節）。

- イエスは、私たちが生きるために死者の中からよみがえった。罪の代価を支払ったのはイエスの死ですが、永遠のいのちの希望をもたらすのはイエスの復活です。「私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちが新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました」（第一ペテロ1章3節）

イエスの死は、私たちの罪の負債を支払ってくれました。イエスの復活は、神との親しい関係・交わりを現実のものにしてくれます。

- イエスは、イエス・キリストを信じて罪を悔い改める者に、永遠のいのち（神との和解・関係）を与える。イエスはよく、永遠のいのちについて語りました（ヨハネ3章15-16節、4章14節、5章39節、6章40節）。多くの人が（永遠のいのちは、死んだ後に天国に行くことだ）と思い込んでいますが、イエスはそうは教えていません。イエスは、ヨハネの福音書17章3節で「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストとを知ることです」と言っています。永遠のいのちとは、神を知ること、神との和解（親しい関係）を体験することなのです。

イエスが自分のためにしてくれた事を信じて罪から離れる人に、永遠のいのちは与えられるのだと、聖書は教えています。聖書では、罪から離れることを悔い改めと表現しますが、これは「罪の無い人間になる」という意味ではありません。「罪の行いよりも、神の方を求めるようになる」という意味です。

永遠のいのちを得るには、どうすればいいの？

ヨハネの福音書3章36節は「御子を信じる者は永遠のいのちを持っている」と言っています。人はイエスがした事を信じることで、永遠のいのちを受けます。あなたのために、イエスは何をしてくれたのでしょうか？あなたの

罪のために十字架で死んで、あなたがいのちを得て生きるために、死者の中からよみがえりました。だれでもキリストを信じて罪を悔い改める者に、永遠のいのちは与えられるのです。

キリストにつき従う歩みは、終わりのない旅です。しかし、その旅はシンプルな祈りで始まります。次の祈りを手本にして祈ってください。「神様、私は罪を犯しました。私の罪が、私をあなたから切り離したことが分かりました。イエス様が、私の罪のために十字架で死んでくださったこと、そして、三日目によみがえられたことを信じます。イエス様が私のためにしてくださったことを信じて、イエス様に信頼します。そして、罪を悔い改め、自分のできる限りを尽くして罪から離れます。これらすべてを、イエスの御名によって祈ります。アーメン。」

今日、あなたはキリストを信じました。その信仰の決断を周りの人々に伝えてください。

神との新しい関係について、追加資料がwww.thisisthegospel.comに掲載されています。

神の家族へ、ようこそ！
ガラテヤ人への手紙4章7節

THIS IS THE
GOSPEL

ThisIsTheGospel.com